

## まれびとの背景

井本英一

イランでも、折口信夫が論じた「まれびと」に類するものが、一年の節目節目に現れる。これらの訪問者は、ただ近現代の民俗に見られるものではなく、悠久の昔から存在したと考えられる。

カズヴィンのタケスタンに伝わる民話に次のような話がある。チェツレ・クーチェク(冬至から40日間をチェツレ・ボゾルグといい、その後20日間をチェツレ・クーチェクという。太陽暦の2月上旬の節分や立春さらには旧暦の正月を含む季節)が、日ごとに明るくなる太陽の娘に恋をし、父親の太陽にお嬢さんを下さいと手紙を出す。父親の太陽は、娘の結婚の用意をするので10日ほど猶予を下さいと返事する。チェツレ・クーチェクは心が高ぶり、腰が破裂せんばかりになる。このとき「正月の老人」が現れ、太陽にいう。「これはお目出度いことだ。どうして娘さんを彼に与えないのかね」。太陽は答えた。「チェツレ・クーチェクは、心が高ぶって腰が破裂してしまいました」。正月の老人は言った。「太陽さん、そんな話を信じてはいけません。昔からいっています。元日から40日間、炭団(たどん)をつけなさい。まだ冬のだから」[Anjavi 1973: 6]。

イランの正月は、伝統的に3月21日の春分に始まる。歴史的に見ると、夏至正月や冬至正月もあったが、春分正月がもっとも優勢であった。春分正月を迎えるためにイラン人は3か月の冬の祭りをして忌籠った。それはちょうど、仏教徒が7月15日の盂蘭盆会を修するために4月16日から3か月間籠る夏安居と同じである。

5世紀初頭、長安から中央アジアを経てインドに入り、師子国(スリランカ)からマラッカ海峡を通過して南シナ海と東シナ海を北上し、山東半島に上陸した東晋の僧法顕は『仏国記(法顕伝)』を残している。『仏国記』の開巻第一から夏坐(夏安居)のことが出てくる。『仏国記』で、法顕は数回にわたり夏坐に触れている。長安を出て乾罽国に到って夏坐し(399年)、夏坐が終わってから前進して罽檀国に到り張掖鎮に達した。ここでも夏坐し(400年)、夏坐が終わると前進して敦煌に到った[長沢 1971: 5-6]。法顕は巻末に近い所で、義熙8年(412)4月16日耶婆提国から帰国するために海上に出たが、船上で安居したと述べている。彼はいずれの場合も、4月16日から7月15日までは籠って活動することはなかった。注釈にいうように、法顕は4月16日から7月15日までの中国風夏安居をとり、5月16日から8月15日までのインド風夏安居はとらなかった。4月と5月の違いが、中国が用いた旧暦とインドが用いた太陽暦のちがいによるものかどうかは明らかにしえない。

7月15日の盂蘭盆は、祖先霊が大挙してこの世を訪れる日であった。この節目の訪問者で

ある祖先神は、正月の訪問者である祖先神と同一の存在であった。イランの新年は3月21日の春分であるが、新年の訪問者がある。正月を迎えるための90日間の籠りの開始日である冬至にも、訪問者がある。7月15日の盂蘭盆を迎えるための90日間の夏安居の開始日である4月15日にも、何らかの訪問者があったと考えなければならない。旧暦4月15日は、二十四節季の立夏(5月6日頃)と小満(5月21日頃)の候にあたるが、古代にはあの世からの訪問者を迎えて籠りに入ったと考えられる。

冒頭のタケスタンの民話に戻ろう。チュッレは40日を意味する。クーチェックは小をボゾルグは大を意味する。冬至から40日間は大チュッレと呼ばれる。イスラム教では、死後40日で死者は再生する。シーア派第3代の教主イマーム・ホセインは、ケルベラで殉教してから40日目に、斬られた首が胴につき復活する。この日をアルバイーン(四十日祭)として祝う。キリスト教徒の四旬節のあとの復活祭や仏教徒の四十九日(中有, 中陰)あとの生有と同じように、40日や47日(灰の水曜日から復活祭まで)や49日は、死者が再生するまでに忌籠る期間と考えられた。万物の死を象徴する冬至から40日間は忌籠りの期間で、立春や旧暦正月がそのあとにつづいた。民話では、このとき正月の老人つまり正月の訪問者が現れ、まだ冬だから元日から40日間、炭団をつけなさいという。この話では、冬至が新年とされた時代があったことが示唆されている。

民話では、40日につづく20日(小チュッレ)が、日増しに明るくなる太陽の娘に求婚する。小チュッレ(チュッレ・クーチェック)は再生と復活の象徴で、さらには冬至の子である大い子の誕生の象徴でもある。小チュッレのあとさらに30日忌籠りをして春分を迎えるのである。30日の忌籠りは、前半15日と後半15日に分けられ、後半は新年を迎える準備にあてられる。この90日を冬の祭りと総称する。

奈良東大寺の修二会は、前年の12月16日(旧暦11月16日)に東大寺別当による修二会の役職の発表があり、別火の行のあと、3月1日から14日まで上七日と下七日の行を行う。3月15日は仏の涅槃会を修し、21日の春分を迎える。聖徳太子一族の忌日も、冬の祭りの期間に入っている。太子は推古30年(622)2月22日に亡くなり、太子妃は前日の21日に亡くなる。母后は推古29年12月21日、太子の子山背大兄王は蘇我入鹿に滅され皇極2年(634)11月16日に亡くなる。太子の愛馬甲斐の黒駒は12月22日に斃れた[井本 1989: 182-185]。

イラン西部のハマダン州のホメイン村には次のような伝承がある。バフマン月(1月20日から2月19日)5日、クルド・アリーおじさんがハマダン郊外のアルヴァンド山に向かい、10日夜山頂に達する。翌朝まで洞穴で休む。クルド・アリーおじさんは、来た道を降り、バフマン月15日村に到着する。この10日間を村の人たちは登高と呼ぶ[Anjavi 1973: 9]。

ハマダン州には多くのクルド人が住んでおり、西北にはクルド族の本拠地であるクルディスタンをひかえる。イラン人にとってクルドおじさんは、ある種の異人である。クルド人の言語であるクルド語は、イランの国語であるペルシア語と同系であるが、文化的にはクルディスタンは異界である。季節の節目に異界から異人が訪れてくるという伝承があるが、クルド

おじさんは異人にあたる。

クルドおじさんは、アルヴァンド山の山頂の洞穴を出て山を降りる。洞穴は井戸と同じように、異界とこの世との境界である。来訪者は他の文化圏でもこのような境界を通過して出現する。バフマン月11日に山頂の洞穴を出て15日に村にやってくる。バフマン15日は立春に相当する。11日から15日までの5日間は、立春を迎える祭りの期間である。

クルドおじさんはバフマン月5日に山に向かい、15日に村に戻ってくる。この10日(11日)間を人びとは登高あるいは山登りという。これは何を意味するのであろうか。クルドおじさんは村人が扮する。その人物が山頂に向かうわけであるが、山に登る村人は、まだ完全にクルドおじさんになりきっていない。どちらかという、神を迎えるために山に登る選ばれた村人そのものである。洞穴から出ることによってはじめてクルドおじさんになる。クルドおじさんが11日に洞穴を出て山を降りる。この日は新年(3月21日)前50日のサダ祭にあたる日である。サダ祭というのは、100日目(サダ)の祭りの意で、起点は立冬(11月8日)前18日の冬の土用の日であろう。

バフマン月11日、イランの地方都市ではレシュキーとマーシーという2人の人物が、家々に春の到来を告げにやってくる。2人の祝ぎ人は、バフマン月の月末まで家々を祝福してまわる。村では、2人の到来は幸福のしるしと考える。2人は赤い服を着て頭にはボール紙の帽子をかぶり、ぴかぴかにした金属片やいくつかの小形の鈴をつけている。顔にはボール紙製の、滑稽な顔つきの面をつける。レシュキーとマーシーの2人は、テヘランで大晦日に祝言を唱えにやってくるハージー・フィールズに似ている。レシュキーとマーシーは、家の庭に入っていくと手にしたタンバリンを打ち鳴らし寿ぎ歌をうたう。子どもたちは、彼らがやってくるのを心待ちにしており、彼らの後についてゆく[Anjavi 1973: 67]。

テヘランのハージー・フィールズは、赤い服を身につけ、顔を墨でまっ黒にし、手にタンバリンをもつ。ハージー・フィールズは春分の来訪者であるが、レシュキーとマーシーは立春のそれである。レシュキーとマーシーは、ときには1人がタンバリンで拍子を取り、他の1人がレシュキーとマーシーの役を演じる。ハージー・フィールズもレシュキーとマーシーも赤い服を着ている。これは死者に犠牲者あるいは犠牲獣の血を注いで再生させることを表わしたのであろう。ハージー・フィールズの黒い顔は、腐敗が始まった死者の肉体を象徴したものであろう。どこか顔にしまりがなく、くずれた輪郭の面も同じような死者の顔を表わしたのであろう。これらの表象は、全て他界の住人すなわち祖先(霊)の表象で、祖先が立春に生者の世界を訪れてくることが分かる。

イランの立春、春分の来訪者は子どもに人気がある。日本の小正月や正月の来訪者は、男鹿半島のなまはげのように、子どもを脅すものが多い。クリスマス節の最終日である1月6日の顕現日(エピファニー)に東方の三博士がベツレヘムに新生児イエスの誕生を祝いにやってくる。顕現日はクリスマス節のいわば小正月にあたる。冬至の子である神の子は、東アジアでいう冬至の大い子にあたり、のちに聖徳太子や弘法大師信仰に習合してゆく。冬至の子は、

春分における聖婚の結実である。いっぽう立春や春分の子は立夏や夏至の聖婚の結実である。これらの節目に生まれる神の子は、神になった祖霊の子である。節目の来訪者は、自分の子孫の誕生を祝福しに訪れるのである。子どもを脅迫してくるのは変化した習俗であろう。

1997年12月13日夜、私は花園大学国文学科の丸山顕徳教授と有志の学生と共に、長野県下伊那郡<sup>かど</sup>上村に伝わる遠山祭りとして親しまれている霜月祭りの見学に出かけた。この祭りは太陽の再生を願う祭りであるので、そのことを象徴する行事がいくつか見られた。中でも注意を引いたのは、2人の男が女装しそれぞれが懐に人形を抱いて、舞殿の中央に設えた湯のたぎった2基の釜の周囲を一巡したときであった。霜月祭りの赤ん坊は、冬至の大い子にちがいない。それは冬至に誕生したミトラや、その影響を受けた神の子イエスとも関係する。冬至の子は太陽と共に成長するが、夏至が過ぎると衰弱してゆく。冬至はイランではヤルダールといい、誕生を意味するアラム語系の外来語である。冬至の誕生は春分における聖婚を前提とした。

祭りは二元論的な構造であった。2人の赤ん坊は、女性と見られる子安観音とコノハナサクヤ姫に扮した男性に抱かれる。早くから2人の赤ん坊の意味は失われ、同様に2人の母親の意味も忘れ去られたようである。2人のうち一方は生を、他方は死を表わした。子安観音は安産と産児の成長を象徴し、コノハナサクヤ姫は海幸彦・山幸彦ら3神を生み安産の神とされるが、姉のイワナガ姫の生命の長久にくらべて花のように短い生命を象徴する。具体的には、死を象徴する赤ん坊はまだ母胎の中にいる子であったり、誕生直後に辻に捨てられる子である。生を象徴する子は、母胎から出てそのまま母の傍で育てられる子であったり、捨てられた子が母のもとに返され、母の傍で育てられる子である。

宵祭りの最後の神舞いは氏神の舞いで、木綿と麻の水干装束をした2人が扇と鈴を手にして舞う。水干にはヘラと呼ばれる三角形の布がついているが、産衣には必ずつけるものといわれる。2柱の氏神が三角布をつけるが、一方は生を他方は死を象徴するのであろう。葬儀では、死者の額に三角布をつけるほか、近親者も額に三角布を付ける。この三角布の三角表象は祭壇を意味すると考えられるが、神舞いの三角布や産衣の三角布の三角表象も祭壇を意味したと考えられる。

面をつけた神々や鬼が出現するが、赤と黒あるいは赤と暗緑の対立する色彩の面をつける。赤は生命を象徴する。黒系は死体が腐敗し始めたときの色で死を象徴する。<sup>おもて</sup>面の舞いでは、狐の面をつけ、赤シャツ、赤股引き、赤足袋、赤烏帽子、赤手甲を身につけた稲荷が見物の中を跳んでまわる。一方、色が赤黒く、眼が輝き鼻が高く、天狗を連想させる面をつけた山の神が剣を手にして出てくる。稲荷と山の神は対偶をなし、赤い稲荷は生を、赤黒い山の神は死せる祖先を表わしたのであろう。神舞いの舞い納めでは、神主が猿田彦面で赤シャツ、赤股引、赤足袋、赤手甲、赤の切絆纏を身につけ、紅白に巻いた弓矢をもって天地五方を射て舞い納める。舞い納めの前に<sup>よおもて</sup>四面の舞いが行われ、土王、水王、木王、火王が出て舞う。舞い納めの猿田彦面は金王と呼ばれる[牧内、中島 1997: 90-147, (ただし、この論文は昭和初年に書かれたも

ので現状と異なる点があるが、参考になった)。霜月祭りは冬至の太陽が増大することを祈願するために、死を追い払う祭りである。このほかに、闘争儀礼や論争儀礼の崩れたと思われる数人の対話儀礼などが見られた。

赤い服装をしたテヘランのハージー・フィールーズに関連した霜月祭りの赤装束について述べた。ハージー・フィールーズは顔に墨を塗って黒くしているが、死と生の象徴が同一身の中に内在することを表わしている。赤い服を着たレシュキーとマーシーの2人は、本来は死と再生を象徴していたので、1人は死を象徴する色の服を着ていたであろう。

テヘランとマシュハドの途中にあるフィールーズ・クーでは冬至の夜に対して「布袋の投げ入れ」という名をつけている。この夜、人々はお互いの家を訪問する。家の主人は客に種々の果物や乾燥果実を与える。あるいは、風呂敷のような四角い布の四隅を結んで袋状にし、つなに結びつけ目当ての家の屋根(陸屋根になっている)に上り、つなに結んだ布袋を中庭に投げ落とすか、下の部屋の前に垂らす。そのあと、屋根を2、3度蹴ると、家の人は気付いて袋の中に乾燥果実や菓子を入れ、つなをぐいと引く。屋根の上の人は袋を引き上げ袋の中の菓子類を用意した袋に入れ、別の家の屋根に向かう[Anjavi 1973 : 19]。

村の住人の各自が冬至の訪問者になり祝言を唱え、対価としての菓子類を手に入れたのが古い姿であったと思われるが、現在は前半部が廃され、ただ物乞いをして家々を廻るようになった。世界各地に残る民話では、冬至や新年のような節目に訪れる人は、乞食の姿をとるものが多いが、もとは祝言を唱える祝人<sup>はきびと</sup>であった。節目の来訪者は観念上のことがらであるが、村では住民各自が来訪者を演じたり、1人を選んで来訪者に仕立てる[Anjavi 1973 : 10]。

来訪者に予定された者は片目を刳られたり、片足を跛にされたりした。『旧約聖書』の「創世記」に出るヤコブは神と角力をし、神に腿の筋をひねられた結果、跛になった。日本武尊も、伊吹山の神の毒気により足が三重に腫れあがり跛になった。オイディプスに代表される捨子伝説では、これから生まれる王子は長じて父王を殺すであろうという占い師のこぼしを信じた王は、新生児の足に針を刺して捨てたり、高樓から落として跛にしたりする。神話時代に近い時代の王位継承は、王子あるいは外来者が王と競技し、勝者が王位についた。王がそのまま王をつづける場合もあったし、王子や外来者が王を殺して新しい王になる場合も多かった。新王は来訪者として新年に即位した。王に予定された者は、片目であったり片足が跛であったりした時代があったり、神話があった。新王は天から降ってきたのである。

現在は布袋は物乞いの道具の観があるが、日本の天孫降臨神話で見られるマトコオフスマと同じもので、胎児を包む羊膜を表わしたのであろう。冬至の大い子が羊膜を破って羊水と共に流出する姿が布袋の背景にはある。フィールーズ・クーの冬至の夜の来訪者は、ペルシア語では誕生という意味のこぼしである冬至の大い子として羊膜と共に陸屋根に降りてきたのである。クリスマスの来訪者とされるサンタクロースは、袋の中に贈り物を入れてやってくる。サンタクロースは冬至の大い子の変形であるが、新生児ではなく老人の姿をとる。来訪者にはこのような二通りの姿があったのであろう。

フィールズ・ターの来訪者は、本来は空の袋を提げてきたのではなく、贈り物を入れてきたのである。人々が太陽の成長と連動して死の状態から再生するためのエネルギーを袋に入れてきたのであろう。袋から贈り物を出し尽したあと、来訪者は人々から負の要素である老廃物を袋に入れたと考えられる。老廃物は来訪者に贈る菓子類に姿を変えたのであろう。場所的、季節的な境界における交換の儀礼が存在した。この世とあの世は全てあべこべで、来訪者がもってくるエネルギーはあの世では負の要素であり、来訪者がこの世でもらう老廃物はあの世では祖霊たちのエネルギーになるのである。

福岡県の太宰府天満宮で正月7日に行われるウソ替え神事では、その日の夕方、人々は1年間もっていたウソ鳥の木像に負の要素を負わせ天満宮に参詣する。境内の大鏡の周りを廻りながら、何度も何度も相手かまわずウソを交換する。そのうち、神社で用意した12個の金のウソを手にした者は吉運を授るとされる。この換え物神事は、交換する2人にとって相手は来訪者である。ウソはそれぞれの罪穢れが乗り移っているが、相手がそれをもらおうと罪穢れは新しい1年を送るためのエネルギーになる。金のウソを手に入れた者だけが幸福になるのではない。

正月10日に行われる大阪の今宮<sup>えびす</sup>戎では、1年間神棚に飾っておいた福笹を降ろし、神社に納めて新品を買って新しい1年間神棚に飾る。福笹は今宮神社の参詣者同士が交換するのではなく、戎神と一回きりの交換をする。戎神は10日にやってくる来訪神(来訪者)で、来訪神はこの世の罪穢れで汚染され、枯死した福笹をあの世のエネルギーとして受け入れる。冬至の来訪者大い子としてのイエスは、この世への来訪者の代表であろう。イエスはキリストとしてこの世に福音と救済をもたらし、人々の罪を負って父のもとに帰る。人々は神の子を食べることによってエネルギーを摂取する。パンとワインがキリストの肉と血を象徴する。

日本神話では、スサノヲノミコトは蓑笠をつけ髪のと爪を抜かれ罪穢れを負わされて高天原から根の国に追放される。その一方、スサノヲは大蛇を殺して王権のレガリアである剣を手に入れ、天照大神に奉ったり、杉・檜などの植林にはげんで民生を安定させる文化英雄でもあった。来訪者が単に福やエネルギーをもたらすだけでなく、その世の老廃物を(あの世の福やエネルギーとして)もって帰ることに注目する必要がある。

3月3日の雛祭りの人形は、明治以降は高価なものは毎年出して使用するようになったが、古くは女子が生まれてから死ぬまで身の傍に置いたあまがつを除いて、普通は毎年海や川に流してあの世に罪穢れを運んでいってもらったものである。旧暦3月3日は新暦の4月上旬にあたり、キリスト教の復活節(移動祝日であるがこの時期が多い)、春分正月の小正月、東アジアの二十四節季の清明(4月5日ごろ)にあたる。キリスト教は祖先崇拜から離れたので、改火とイエスの再生復活の祭りとなっている。春分正月を祝ったゾロアスター教では、年末に祖霊が大挙してこの世を訪れてきた。ゾロアスター教では、祖霊がいつまでこの世に留まるか不明な点があるが、小正月まで留まってあの世へ帰ると考えるのがもっとも相応しい。テヘランの新年で見られるハージー・フィールズは祖先霊の来訪者と見ることができる。

清明末期の歳時記である敦崇『燕京歳時記』によると、二月の項に清明は寒食で禁煙節ともいう。古人はもっともこれを重んじた。現在は人々は節日とはせず、子供は頭に柳を戴き人々は墓を清掃するだけであるという[敦崇(小野訳) 1967 : 65]。清明、寒食は旧3月の行事であるのに2月の行事とされている点、著者敦崇にはなじみの薄いものになっていたことが分かる。しかし重要な情報を伝えている。清明が古い時代の季節の代わり目であった証拠に寒食として火を消したことをあげている。復活節と同じように、新しい季節の到来と共にあらたに火をつけたのである。子供の頭に早春いち早く芽を吹く柳の小枝を挿したり、枝で編んだ冠を戴いたりしたのは、子の誕生を意味した。人々は墓に参って清掃したというから、祖先に会いに行ったのであろう。柳の枝を戴いた子供は、来訪者の姿であったかも知れない。この日人々は鞦韆がらんこに乗るといふ。鞦韆技は天地を往復する行為で、天上から訪れる来訪者を表わすと考えることもできる。

宗懐『荆楚歳時記』によると、寒食は冬至から105日あるいは106日目にあたり、清明の前2日にあたる。寒食節は火を断つ。その理由は、晋の文公が王子のころ忠臣介子推をつれて国外に逃れたとき、子推は自分の股を割いて文公に食べさせた。19年の放浪のあと、文公が故国に帰って即位したとき、介子推だけは論功行賞にあずからなかったので山に隠れてしまった。文公は子推を探し求めたがでてこなかったので山に火を放った。子推は木を抱いて母と共に焚死した。このために人々は子推を悼んで火を断つ[宗懐(守屋訳) : 97-98]。

介子推は晋の国の文公をはじめ人々に幸福をもたらした山の神としての来訪者であった。文公は子推の肉を食べて死をまぬがれた。エネルギーをこの世に運んできて、この世の罪穢れを一身に背負った来訪者としての子推は、現実の人間あるいはそれに代わる人形として焼いて捨てられたのであろう。この日には鞦韆技はないが、『荆楚歳時記』によると立春の日にそれが行われた。鞦韆は再生儀礼に関する行事であった。

清明は中国や朝鮮や沖縄でも年中行事として残った。李朝末期の洪錫謨『東国歳時記』の3月の項の清明と寒食は次のようにいう。清明の日、榆いれと柳の木で火をとり各官庁に頒賜する。これは周官の出火と唐宋の賜火の遺制である。ソウルでは、元旦、寒食、端午、秋夕(8月15日)の四大名節に墓参りをするが、寒食と秋夕にもっとも盛んで、郊外では墓参りする男女が列をなし絶えることがない。火に対するタブーは、介子推の焚死に帰している[洪錫謨(姜訳) 1971 : 76-78]。

前掲書所収の金邁淳『洮陽歳時記』にある3月寒食の項でも、この日柳の木を錘揉みして火をとり宮中に進上する。国王はこれを宮中、諸司、大臣の家に頒賜する。『周礼』の夏官によると、火に関する制度を管掌した役があったと述べられている[金邁淳(姜訳) 1971 : 201-202]。朝鮮の四大名節は祖先祭と深い関係をもつし、再生の祭りであったので改火の習慣があったと考えられる。

聖都コムからハマダンに通じる街道の中間に位置するアラークでは、冬至から40日後、新年の50日前つまり立春ころに祭りが行われる。一軒の家の前に仮面をつけない男女が黒い仮面

を被った4人を伴って現れる。男は顔にまで達する長い杖をもつ。彼らのうしろにはロバに乗った老人、大鼓や笛をもった楽人がおり、その演奏に合わせて男女が踊る。4人の仮面人は2人ずつ組になり、手にした杖を互いに打ち合う[Anjavi 1973 : 74-75]。

アラークの立春祭に現れる来訪者に従う4人は、2人ずつ、ちょうど日本の長刀を構えて刃の先を合わせるような姿勢をとる。黒の仮面と粗い衣服は死の世界に属することを表わしている。このような棒の打ち合いはシーア派のイスラム暦1月10日(アーシューラー)に行われる教主ホセインの追悼行列においても見られる。

この行列には鎖打ち苦行者が2列になって力強く踏むようにして進み、先頭のシンバルの音に合わせて鎖で両肩を交互に打つ。鎖打ち苦行者のほかに刀剣毀傷者が2列縦隊になって行進する。彼らは各人が左手で隣の男の帯をもち、右手に剣をもつ。彼らは前もって剃っておいた前頭部を傷つけて「ホセインさま！」と叫ぶ。彼らの純白の長衣が滴り落ちる血で染る。他の男たちがこの2列の間を進み、棒でもってはげしい刀剣の刃先を和らげる。観客は刀剣毀傷者にキャンデーを与える[Massé 1938 : 129]。

この場合は、2列の左右の苦行者の間に1人が入り、手にした杖を左右どちらかの人の刀を受ける。2人が棒を交差させる形の変形である。ところで、17世紀のイタリア人デッラ・ヴァッレは1月9日のイスファハンにおけるシーア派の行事を記録しているのでここに引用しておこう。

多くの人は黒い喪服に身を包んでいる。この黒い喪服は他のいかなるときにも身につけないものである。この期間、誰もひげを剃らないし風呂にも入らない。人々はイスラム法で禁じられたあらゆることばかりかあらゆる娯楽を差し控える。貧しい人々は、人通りの多い道路に穴を掘って口の所まで体を埋め、頭にはこの目的でつくった素焼きの鉢を被せる。彼らは1日中そのままの姿勢で過ごす。ある者たちは、頭から足までまっ黒に塗り、陰部いがいは全裸になって行進する。別の者たちは、黒の代わりに身体を赤く塗り、同じように全裸で彼らに従う。赤は教主ホセインの流した血の色である。彼らはみな物悲しそうな調子で教主ホセインの殉教を讃え、2本の短棒あるいは2本の動物の肋骨を打ち合わせる[Massé 1938 : 130]。

『イスファハンのハジ・ババの冒険』(岡崎正孝他訳、平凡社、1984)の著者J.モリアの『第2回ベルシア紀行』にテヘランでの1月10日の儀式が詳しく記述されている[Morier 1818 : 175-184]。

行列の特徴の多くはアクロバットの的である。ある男は長い竿の先に『コーラン』の聖句を彫ったブリキの円板をつけている。ある男は棒のてっぺんに若い吟唱僧をのせている。ある男は背中に革袋をかつぎ、袋の上には4人の少年が座っている。それは教主ホセイ人が苦しんだ喉の渇きの象徴である。預言者マホメットの墓といわれる石棺が8人の男に担がれ、そのうしろに2人の男が先端に金属の手形をとりつけ、リボンを垂らした竿を1本ずつもってついてゆく。教主ホセインの殉教に関係のあるいろいろなものをつけた4頭の飾り馬が進む。



血にまみれた屍衣をつけた一団の男たちがつづく。教主ホセインの白馬は体じゅう傷と矢を受けたように見せかけ、黒衣で覆われている。そしておよそ50人の男が互いに棒を打ち合う [Massé 1938 : 134]。

このように、棒を互いに打ち合ったり、左右の手で棒を打ち、拍子を打つように胸の前や頭上で打ったりする風習は、古代エジプトの墓室の浮彫りにもあった。死者の前で打ち合うメッカ打ちという風習がアイヌの間にあった。死者があったとき兄弟親戚が集まって慟哭し、棒をもって血を流すまで打ち合った。それは追善の意味があるとされた。また、このメッカ打ちは刀を抜いて相手の額を打って血を流す風もあったので、哀悼傷身の習俗とも見られている [井本 1992 : 126]。それぞれの地域で棒を打ち合う意味を付しているが、本来は、新生児、成人、死者の通過を促進するため、魂を賦活する行為であったと考えられる。季節の変わり目にある人に対して、来訪者が棒を打ち合うことによって衰弱した魂を活性化して新しい季節に参入することを助けるのである。再生儀礼であるので赤と黒が象徴的に用いられる。しかし、どれが死でどれが再生を象徴するのか分かりにくくなっている。

上述したイランのアラクの立春の祭りでは、この4人の黒い覆面をした男たちは、統率者の男と棒で打ち合いを始め、彼を打ち倒す。彼は地上に意識を失ったまま横たわる。妻の女は彼の傍にかけより、彼を膝に抱いて介抱する。村人が彼の口の中に羊の糞数個を掌の中でつぶして入れると、彼は意識をとりもどす。かくて一行は次の家を訪れて同じことを繰り返す。村人の信ずるところによると、もし来訪者がいないときは縁起が悪いという。この来訪者は家畜にとっても好運をもたらす。来訪者は手にした杖で馬(牛)小屋の戸をはげしく打つのがその証拠だと信じられている。家畜はこの結果子を はらみ繁殖する。村の若者たちは妻を略奪しようと試みるが、彼女が尖った長い袋縫い用の針もっているので近づけない。もし近づけばひどい目にあう羽目になる。それでも、ときどき若者たちは彼女を略奪することに成功する。しかし、夫から何かを手に入れなにかぎり彼女を返さない [Anjavi 1973 : 76-80]。

ここでは立春の来訪者たちが模擬戦を演じる。再生儀礼のさいに模擬戦を演じるのはエジプト時代から見られるものであるので何らこと新しいことではない。順序が逆になっているかもしれないが、闘争のあと来訪者が儀礼上の死者になって地上に倒れ、口に汚物を入れて再生する。口の中に羊の糞のような汚物を入れるのは、死者の口の中を実際につくって見せることである。

来訪者は家畜小屋の入口の戸を打つ。人々が考えるように、それは家畜の繁殖のために行うのであろう。しかし古くは別の考えに立って行ったと考えられる。家畜をはじめとした動物すべては、人間が生前、死後に居住する世界の生き物で、個人あるいは氏族、民族は特定の動物を祖先にもつと考えられた。優れた個人あるいは始祖の誕生は、馬(牛)小屋や野生動物が住む小屋から変容した洞穴に関係するものが多い。

来訪者夫婦のうち妻を略奪しようとするのは豊穡を手に入れようとする行為である。女性原理は、来訪者がこの世にもたらす恩頼と考えられたのである。来訪者の妻を略奪するため

に、村の若者たちは来訪者一行ともみ合う。さちを手に入れるさいにもみ合いをするのは一種の闘争儀礼で、棒での打ち合いと同じように再生するための呪的行為であった。来訪者の妻自身が豊穡を象徴するさちで、来訪者ももたらす恩頼であるが、村人は夫の来訪者から何かを手に入れて、それと交換に妻を返却する。ここでは、二重に恩頼を手に入れるように見えるが、通過儀礼で見られる略奪と交換のモチーフが同時に出ていていると考えればよいであろう。妻は袋縫いの針もっているが、来訪者ももつ袋の記憶が現れている。針や釘もただの防禦の道具ではなく再生儀礼で必要とされているものであることは別に論じたことがある[井本1985]。

本来の祭りの日の1か月前にあらかじめその祭りと同じことを祝う習慣は、日本ばかりでなく他の国々でも見られる。イランのカーシャー(テヘラン南方200キロ)周辺の村々では、新年前の12月(エスファンド月)1日の1～2日前に家の掃除をし、12月1日新年の食卓を飾り、新年の七草を用意する。村から地方に出かけた人々は、どこにいても2日前の夜には帰ってこなければならない。人々は12月1日の前夜には、お金を手にしていなければならない。新しい年に金持ちになれるようにというまじないである。

この夜、バーバー・ザールという老人が訪れてくる。この老人は80歳以上で、杖を手にして村人の家々を訪れて祝福する。バーバー・ザールには妻がいるが、この妻は不幸と嘆きを象徴する。この夜、婚約者の女性は相手から贈り物を受け取る。家によっては、女性に白い子羊を贈る。小羊には錦の衣服を着せ、首には金の鎖を掛ける[Anjavi 1973: 91-93]。

新年1か月前の祭りで、新年にも訪れる来訪者が夫婦で各家を祝福しにくる。この場合、女性原理である妻は豊穡を象徴するのではなく災厄を象徴する。来訪者ももっている恩頼と災厄が本来の特徴であった。災厄は来訪者ももたらすのではなく、村人から恩頼と交換して来訪者ももち帰るものであった。前述したアラークにおける立春の祭りでは、来訪者の妻は村人に略奪されて夫に返却される。この段階で来訪者の妻は村人たちの穢れを背負うのである。夫の来訪者は負の荷物を象徴する妻を祖霊の国に連れ帰るのである。

新年は始原の出発点と考えられてきたので帝王の即位式や婚礼などが行われた。許婚者がこの日(1か月前であるが)飾った白い小羊を相手からもらうが、ふつうの贈り物ではなく、発生的には別の意味ももっていたと考えられる。小羊(アグヌス)は神の小羊(アグヌス・デイ)で神の子とされた。神は祖先霊の純化された観念であり、神の子は人間に殺されて食べられることによって人間を賦活することができた。神の子はあの世からの来訪者で、人間に恩頼をもたらす。この場合は来訪者である小羊は、人間に食べられ、それと交換に人間の穢れを担ったのであった。神の子イエスは神の小羊であり、神の国からの来訪者であるが、人間の罪、穢れと交換に肉と血を人間に与え神の国に帰ってゆく。

奈良正倉院に伝わる羊木藹纈屏風に描かれた羊は生命の木の前面に立つ。羊の胴に散りばめられた三角文は衣服の文様であろう。首には何本かの鋸歯文が描かれている。連続三角文もある。この羊は、神の小羊で、生命の木と一体になった再生のシンボルである。フランスの

ギメ博物館にあるササン朝の錦に見られる羊文も、胴には衣服をまとっているし、首には幅のあるリボンを巻いている。この羊も単なる羊ではなく神の小羊である。白い羊の毛にヘンナで柿色の文様を描いているのは、所有者の目印にはなるが、衣服の文様であった。

来訪者バーバー・ザール(ザール爺さん)は白髪の老人で、イランの国民的英雄ロスタムの父である。ロスタムは、ある伝承では片腕で生まれる。これは何を意味するのかというと、片目、片足、片手は神の容姿であるので、ロスタムは神(の子)の姿で生まれたことを意味する。ザールはロスタムの父であるので神であった。ザールは山から降りてくる神であり、祖霊であった。ザールは男性の老人であるばかりか女性の老婆でもあった。ここではザールは恩頼と災厄を象徴し、両義性をもつ来訪者として描かれる。

神が本来は両義性をもつものであることは、インドの対偶神ミトラ=ヴァルナやイランの善神アフラ・マズダと悪神アンラ・マンユ(アフレマン)を見ると分かる。神のもつ両義性が、2つに分離独立してそれぞれ独自の神格を形成していったと考えられる。来訪者が恩頼と災厄をたずさえてくる古い伝承があった。同時に、来訪者はこの世にやってきて恩頼を各家に与え、代わりにこの世の罪・穢れをもってあの世に帰る。これら2種類の来訪者はどちらが古いのかという疑問が生じる。前者の方が古いといえる。

アンジャヴィーが記録した折目の来訪者は上述したような特徴をもっていた。次にB.ファラヴァシー『ファルヴァリーの世界』に記録された折目の来訪者について考えてみよう。ファルヴァリーというのは、ゾロアスター教のフラワシにあたり、死後にも生き残る霊魂で、祖先霊となる。祖霊は年末に大挙してこの世を訪れてくる。ファールス地方の人々は屋根(中近東の民家は殆ど陸屋根になっている)の上にもいろいろな食物を供え祖霊の来訪を待つ。このとき金属製の食物の容器をさじで打って祖霊に合図を送る。祖霊は音がした方に向かってくる。このような折目には、子供が祖霊に扮し、さじで食器を打ちながら家々を訪問し菓子や食べ物や小銭をもらい歩く [Farahvashi 2535 : 45-46]。

古代イランでも、死海文書にあるクムラン宗団と同じような年の始めが水曜にあてられた文化があったらしい。火曜の夜は除夜で人々は道路上に一行に火を焚いてその上を跳びながら「君の赤は僕のもの、僕の黄色は君のもの」と唱える。この行為は一種の厄除けに見え、節分の追灘の行事を想起させる。呪言を唱ながら一行に並んだ焚き火の上を跳んで走る男女は、あの世とこの世の境界に焚かれた火を跳び越えてくる祖霊を演じたのであろう。健康と病気の交換を囃しながら祖霊がやってくるのであるが、「僕の赤は君のもの、君の黄色は僕のもの」というのが祖霊がいうことばである。祖霊のことばとして「福は外、鬼は内」となる。

来訪者は無言でこの世を訪れるのではなく、音なのである。さじで食器を打つのは、この世の人からいえば祖霊を呼ぶ行為になるが、祖霊がこの世を訪れて供物の容器をさじで打てば、祖霊の音ない、音ずれになる。日本の民俗でも、食器を箸で打つ行為を忌む。食卓での行儀となっているが、かつてはこうすると祖霊が訪れてくると考えられたのである。王朝時代には、殿上で天皇と共に神人共食をするとき、一人が食器をさじで打つと皆が一斉に食事を始

めた。イランの子どもが来訪者を演じ、さじで食器を打つ(ガーショク・ザニー)のが古い習俗である。

ササン朝時代、新年にさいして最初に帝王の前に現れる異人はゾロアスター教の大司教であった。大司教は葡萄酒の入った盃、指輪、金貨、銀貨、まだ青い麦の穂、剣、弓矢などをたずさえて王の前で祝言を唱えた。これが終わると廷臣たちが参内した。外城では、テヘランの新年に出てくるハージー・フィールーズと同じような黒人の道化が家々を訪れて人々に笑いをもたらした。

新年には、よい名をもち、幸運で、弁舌のたつ美男子が宮殿にやってきて参内の許しを求めた。王は尋ねた。「汝は何者か」「どこからきたのか」「どこへゆくのか」「誰といっしょにきたのか」「何をたずさえてきたのか」。男は答えた。「私は2つの幸福の方からやってきた」「2つの幸福の方へゆく」「私はいつも成功と共にある」「私の名前は幸福だ」「私は新年をたずさえてきた」「王に良き報せと祝福と神のこばをもってきた」。王は男をもてなした。すると男は、小麦、大麦、粟、稗、豆類、胡麻などでつくった小さなパンが並べてある銀の皿を王の面前に差し出し、王に幸運と長寿を祈った [Farahvashi 2535 : 52-54]。

ササン朝宮廷を訪れる新年の訪問者は、日本のまればいと同一ような一面性をもっていた。宮廷に溜まった旧年の罪穢れと交換に福を与えるというのではない。かなり洗練された宮廷儀礼になったので、こちらは省かれたのであろう。ただ、この二元論的思考が2つの幸福といった表現の中に見られる。2つの幸福というのはゾロアスター教のアムレタート(不死)とハルワタート(健全)のことである。さらに古くは不死の飲食物と健全の飲食物を指した。いずれも不死なるものと死すべきものを象徴した。健全は不死とちがって死に進むことを前提とした。来訪者が不死と死の国からきて、また不死と死の国へ帰るとするのがもとの型であった。不死と死の国は浄と不浄の国のことであった。

2つの幸福の国すなわち不死と死の国である極楽から王を訪ねてきた男は穀霊であった。大司教は麦の青い穂を手にしてそのことを表わした。別の訪問者は小麦、大麦のような五穀でつくったパンをたずさえてきた。このことも、訪問者が穀霊であることを表わす。この場合、他の場合における訪問者と同じように、問答や論争やもみ合いは通過儀礼の一つで、人の誕生や死に際して見られる苦悩とのたたかいを象徴するのであろう。

現在のイランの各地で、ことに正月13日の小正月の日に、一人のひげの少ない男が布あるいは紙でロバやウマの頭部と尾部をつくり、身体の前後にとりつけて神話時代の人面獣像に扮する。この像は輪廻の途中の靈魂の像で、今日のスラヴ諸国でも広く見られるものである。若者たちは春祭りでこのような扮装をして靈魂が地上を訪れることを演ずる [Farahvashi 2535 : 68]。

スラヴ諸国の中には正月12日間このような扮装をした来訪者がある国がある。この期間人々は祖霊を表わすさまざまな動物の仮面を被って踊る。これらの国々の伝承によると、穢れた12の靈魂が1年を通して大地を載せている柱を噛む。柱が倒れそうになったときが1年

の終わりで、穢れた靈魂たちが祭りのために地上を訪れ、踊りに夢中になっている間に柱は修理され元の状態に復する。これらの悪霊は正月13日、再び柱を噛む仕事を始める。スラヴ諸国では、正月13日は聖なる12日間の後の最初の俗の日で、解放の日であり創造の日でもあった [Farahvashi 2535 : 68-69]。

イランでは来訪者はひげの薄い人物が、それを演ずる。ひげが濃いのがこの世的で、薄いのがあの世的とはかならずしも断言できない。葬礼の忌みに入る者は、ひげを生やしつばなしであるからである。祖霊の世界は祖先獣の世界であるので、全身に体毛が生えている理屈になる。生来ひげの薄い人物がこの役を担うのは別の理由からであろう。この世で神に近づこうとする者は、世を捨て頭を丸めて神殿や修道院に入るならわしであった。そこで小正月に現れる獣人は、あの世の立場で扮したのではなく、この世の立場で扮したと考えられる。ファラヴァシーはアル・ベールニーの『古代諸民族の暦法』を引いて次のようにいう。ササン朝のホスロー1世時代の初春は(暦のずれで)別の月名で呼ばれたが、正月1日、一人のひげのない男がロバに乗ってやってきて手に1匹のカラスをもち、うちわで自分の体をあおぎ冬に別れを告げ、人々からいくばくかの報酬を手に入れた [Farahvashi 2535 : 68]。ひげなし男とロバの習俗は古くからのものであった。

日本の正月に訪れる獅子舞いは、2人がそれぞれ前脚と後脚を演ずる形式が一般的であるが、この場合、人は顔を出さないでイランやヨーロッパで見られるような人面獣にはならない。もう一つの獅子は、上村の冬至祭りに見られたような、1人の男が獅子頭を捧げ他の1人が鞭で獅子頭を打ちながら祭場を廻るものである。獅子頭を打つのは、この世を訪れて子孫を賦活する祖先獣の獅子を恐らくはこの世の人間が鞭で打つのである。伎楽系統の前者はユーラシア的な祖先獣の姿を伝承している。風流系統の后者は、中世の芸能として日本独自に発達したかという、かならずしもそうともいえない。エジプトやギリシアの古代の動物面の習俗を見ると、日本の中世に発達する以前からの日本あるいは周辺国により古い形が存在したと考えられるからである。

祖霊は浄化された段階のものを考えるのが一般である。しかし祖霊は古くは穢れたものと清らかなものとの2通りがあった。ゾロアスター教では、他の宗教と同じように、死者の魂は3日間、死者の頭の辺りに座していた。死者の魂はこの期間が過ぎると、美しいダエナーという意識の女性化したものに導かれて祖先の国に進む。しかし死者の魂は肉体から分離した血なまぐさい存在で、春のバターを摂ることによって浄化される [伊藤 1967]。祖先霊にも両義性があることがわかる。スラヴ人の間では、この世を訪れる靈魂の中には穢れた靈魂もある。この穢れた靈魂は、人間の罪、穢れを背負って祖先霊の国へ帰り浄化されないままの靈魂であるかも知れない。祖霊の中には、この世を訪れて危害を加えるものがあると伝承される。

祖先霊には男女の性別はない。日本の幽霊や外国の幽霊(ゴースト)には怨霊と見なされるものがあるが、浄化されない、まだ祖先になりきれない靈魂の一部であろう。しかし浄化された靈魂は家の祖先となり、子孫である家族の1人1人に祝福をもたらす。この靈魂は特定さ

れた個人や家の祖先霊であるばかりか、村中の家々の祖先霊でもある。それは村全体の祖先霊であり、氏神となり城隍神へと発展する。折口信夫が唱えたまればとは、このような祖先霊が来訪者の形をとったものであったと思われる。柳田国男は、終生折口の概念化に疑問と逡巡をもちつづけた。その理由は分からないが、二人の性格上の相克だけでなく、学風のちがいがあったと考えられる。研究者は諏訪春雄、川村湊編『訪れる神々——神・鬼・モノ・異人』に描かれた来訪神を比較検討してその本来の姿を明らかにされたい。

## 参考文献

- Massé, H. (1938) *Croyances et Coutumes Persanes*. Paris.
- Morier, J. (1818) *A Second Journey through Persia, Armenia, and Asia Minor, to Constantinople, between the Years 1810 and 1816*. London.
- Anjavi, S. A. (1973) *Jashnhā va Ādāb va Mo'taqedāt-e Zemestān*. Tehran.
- Farahvashi, B. (イラン皇紀 2535) *Jahān-e Farvārī*. Tehran.
- 伊藤義教(訳)(1967)魂の運命 辻直四郎(編)『ヴェーダ アヴェスター』(世界古典文学全集 3) 筑摩書房.
- 井本英一(1985)『境界・祭祀空間』平河出版社.
- 井本英一(1989)『輪廻の話』法政大学出版局.
- 井本英一(1992)『習俗の始原をたずねて』法政大学出版局.
- 敦 崇(小野勝年訳)(1967)『燕京歳時記』平凡社.
- 洪錫謨(姜在彦訳)(1971)東国歳時記『朝鮮歳時記』平凡社.
- 金遺淳(姜在彦訳)(1971)洌陽歳時記『朝鮮歳時記』平凡社.
- 宗 懐(守屋美都雄訳注・布目潮瀨他補訂)(1978)『荆楚歳時記』平凡社.
- 長沢和俊(1971)『法顯伝・宋雲行紀』(訳注)平凡社.
- 牧内武司, 中島繁男(1977)遠山の霜月祭り『祭りの諸形態』2(日本祭祀研究集成4) 名著出版.

(桃山学院大学文学部)